大地

20号
1991. 10. 20
真宗大谷派 浄 国 寺
☎（23）5724

俳句五句

山崎　睦

堂内に偈の声満てり報恩講

栗御飯炊きてもてなす報恩講

新米の仏飯なれば高く盛る

新米の香り一息深く吸う

休耕の田一面に蕎麦の花

報恩講

「如来大悲の恩徳は
身を粉にしても報ずべし
師主知識の恩徳は
骨を砕きても謝すべし」
（恩徳讃）

十一月二十八日は、浄土真宗の宗祖親鸞聖人の御命日です。京都の本山、東本願寺では毎年この日を中心に報恩講がつとめられます。また全国の末寺でも、それぞれのお寺や地域の事情に合わせて、お取り越し・おたや・お引き上げという呼び方で、つとめられます。報恩講はいわば毎年おつとめする親鸞聖人の法事（法要）ということになります。私共の浄国寺ではこの二十年来は毎年十一月一日を報恩講に決めておつとめして参りました。

真宗門徒にとって最も大切な行事といわれる報恩講はかつて、各家庭でもつとめられていました。今は各地に少しづつその名残りを止めるだけになってしまいました。ただ、各家庭の年忌法要の際にそれに先立って赤いローソクをともして正信偈を読誦するのは、実は親鸞聖人のおとりこし一報恩講をおつとめし、それに引き続いて年忌の法要を行っているのです。

私共の浄国寺に於いては報恩講を迎えるために境内、本堂の清掃、仏具のお磨きをします。そして有志の方々から寄せられた花をお供えして、余間には親鸞聖人の一生を絵にあらわして軸にした「御絵伝」をおかざりし、お華束を盛って荘厳を整えます。当日は、境内の栗を使った栗ご飯を、皆さんから頂いた新米で炊きあげて、準備をします。

法話は今年も五智・光源寺住職の堀前恵咸先生に、昨年に引き続き「正信偈について」をお話いただきます。『正信偈』は「帰命無量寿如来」で始まる親鸞聖人の偈文で、真宗門徒には最も馴染み深いものになっております。何かと忙しい秋の一日ではありますが、この日一日はどうぞ本堂に集うて、一緒に『正信偈』のいわれに触れてゆきたいと思います。

報恩講の御案内

十一月一日（金）
十時　正信偈の練習
十時半　読経
十一時過ぎ　法話
「正信偈について」
おとき
午後　ひきつづき法話
講師　五智光源寺　堀前恵咸先生

こ・れ・か・ら

山崎慎子

それだけ年をとったのだろうか。あるいは気持が少し穏やかになったのだろうか。此頃になってやたら幼いこどもが気になって、可愛いくて仕方がない。通りで見かける乳幼児の、とらわれのない姿に魅せられて、足を止めてしまうことがしばしばである。他人の子ならば、可愛いところだけ無責任に眺めていれば楽なことだということは勿論あるにしても、泣いてぐずぐず言っているところや、ヤケを起こしてわめいていても、何だか嬉しくなってしまうのだ。

そういえば娘が生れてしばらくの間私達親子は関西に住んでいて、夜になると時折夫の肩車の娘と一緒に公衆電話まで散歩がてら、高田の父母によく電話をかけたものだ。アパートに電話などなかったし、公衆電話も今のように便利なテレホンカードもなく、大量の十円玉が必要だった頃のことである。娘は比較的言葉の遅い子だったので、気紛れに声を発するばかり。受話機の向うの母は孫の声が聞きたくて仕方がない。「マー子。マ子ちゃん！」と呼びかけるが思うような反応はない。思い余った母の曰く「慎子さん、何とか泣かせてみてよ」……。その頃も、そうまでして孫の声を聞きたい母の気持が少しは分ったつもりだったけれど、それよりもむしろ、そういう母の発想の方が私には、はるかに興味深く面白いことだった。

ある時期まで赤ん坊の泣き声など、あまり聞きたくない種類のものであったのに、例外はとにかく、泣き声、泣き顔さえ好ましい感じなのだ。

これは間違いなくそれだけ年をとったのだ。ただそれは負け惜しみでも何でもなく、良い年の重ね方ではないかという自負もある。

夫は若い時から大のこども好きで、こどもにも結構、なつかれる人なのだが近頃は二人で外出した時など、たまたま園児の集団に会ったりすると、つい二人で足を止めてしまう。「ねえ、よりどりみどりだよ。中から一人さらって行って、うちの四番目にしようよ」などと物騒なことを口走ったりする。

過日、親戚の出産祝いに母と出かけた。三番目の子が生れて四ケ月も過ぎているという実に呑気なお祝いだったのだが、四才、二才、〇才がそれぞれの個性を発揮しながら、幼いなりに兄弟愛を発揮する姿が何ともほほえましく、又うらやましかった。「良いですねェ。小さい子って面倒だけど、本当に良いですね」を繰り返す私に、「あなたの所も、もうじきよ」と一言。世間一般の常識からいえば、何ら疑問をはさむ余地のない言葉なのに、私にはじわじわと寂しい言葉だったのである。つまり、四十五才の私には二十歳を過ぎた娘と二十歳間近い息子、高校生の息子がいて、孫がいても不思議のない年頃。ところが私の気持の奥では、私だってもうひとふんばりすれば、四番目の赤ちゃんが抱けるんだわ、という思いがあったのだ。叔母の一言は、そんな私にとっては痛烈なとどめの一撃だったわけで、私は一人でおかしく、そして少しだけ寂しかった。

小さいこどもをいとしいと思う近頃、大きなお腹の妊婦さんに会うと、大変そうだけど何て幸わせそうなのだろうと思う。そして子育て最中の若いお母さん達にも、忙しいけど今が一番良い時期なのよ、と心の中でメッセージを送る。同時にふと、今の私の年代を過ぎた人から見れば、今の私の年頃ほど、一番良い時期だと伝えたい思いの人が沢山いるのではないか、ということに思い至る。

先年亡くなった画家の中川一政さんは八十八才になってもまだ「年をとったらあれも描きたい。これからあれをしよう」とウッカリ言ってしまうのだと言っておられるし、八十才を過ぎて自伝を書いた作家の宇野千代さんはその著書に「生きていく私」と題した。

人間、生きているその時、その時が今がいちばんなのに、そしてこれからが輝いていく時なのに、なかなかそのことに気付けずにいるものらしい。

「正しい信に向う」

藤巻　加藤千里

現在私は、人身受け難しと言われる娑婆世界に人間として生を受けて、天地大自然の恵みを頂いて生かされて、早八十才を越えました。過去を振り返り想いますと、六十才迄は川の流れのように流されて働き続けて参りました。六十才を一期として大病の為働くことが不可能になりました。その後仏法を聞く縁を得て、仏法の真実とは如何なる点に存在するのかと自我の思いのままに仏教の本を求め、法話を聞き、キリスト教や禅のラジオ放送やテキストを読み、様々な宗教集団の誘いにも耳を傾けてひたすらに真実を体得したいものと迷い続けて参りました。然し、自我の思いで、如何に追い続けようとも真実は得られないのですね。自分の心の中に正しい信心がないからなのではないだろうかと、此頃は釈尊と親鸞聖人の教えを旨とする聞法会に出会って、自らの姿のありようを、業の深さをどんな猛火にも焼滅することなく、肉体が滅しても、自らの積み重ねた罪業は来世に於いても消えることなくその人について廻るものであると知りました。

ただ弥陀仏の本願力の廻向にのみ、正しい信心を念頭において、求道聞法の道を歩み続け、無碍の一道に達することが出来得るならば幸いです。

釈迦の教えに説かれてあるように、凡夫に念じて下さる諸仏が在ります。

（偏覆三千大千世界　恒河沙数諸仏各於国土廣長舌相説誠実言――仏説阿弥陀経）

善導大師の二河の白道、釈迦の発遣弥陀の悲心招喚等、此の真実の本意を今日まで自覚できなかったのも、自我心のためと思います。

「人間は人間だから、宗教意識の或は潜在し或は微動していないものはあるまい。宗教は人間が人間で存在する限り有るものであり必要である」これは鈴木大拙師の教説であります。金子大栄師は「仏法が振はないと云う人はその人の上に振わないのではないか」と教え残されております。

末法の時代と言われるのも同じことと思います。

釈尊の教え、親鸞聖人の教えは永久不滅であります。

私も人間として存在する限り、仏法の正しい道を求め聞法にはげみたいと念願する次第です。

南無阿弥陀仏

加藤千里さんは藤巻に、長男夫婦とお孫さん、「みなみ」という名の犬と暮しておられる篤信の人である。大病をなさってからはあまり無理はできないらしいが、少しぐらいの雨でも自転車で走る。補聴器をして少し耳は不自由そうだが、時々当寺本堂の書棚から本を見つけ出しては借りて行かれる。又、余程のことがない限り、寺の行事には欠かさず足を運んで下さるし、月参りに行った折にも、いろいろ刺激をして励まして下さる。加藤さんも又、これからの人。ちさとという優しい名前であるが、実は男性。二度目の寄稿である。

悲しい色

山崎隆昌

関西のフォーク歌手の上田正樹が、「悲しい色やね」という歌を唱っていた。

にじむ街の灯を　ふたり見ていた
桟橋に止めた　車にもたれて
泣いたらあかん　泣いたら
せつなくなるだけ　（後略）

バラード調のゆっくりとしたリズムの歌で、男女の哀しい愛に揺れうごく女心を少しかすれた声で語るように唱っていたのが記憶に残っている。（僕は音楽にはとんと不案内で、たまたま聴き、それが耳に残っていただけで、この歌も僕自身は唱えない）

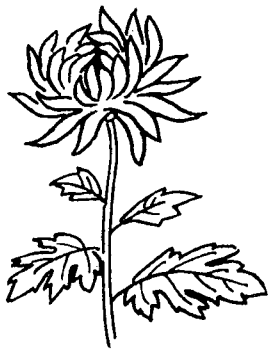
「人生バラ色」とか逆に「灰色の人生」とか又「ブルーな恋」等々、状況や感情が色によって表現されることがしばしばある。例えばエロティックなものと桃色とがどこで結び着いたのか不思議といえば不思議である。新緑の春の山に咲く山桜の色の美しさなど、エロティックなものとは程遠い。

ところで「悲しい色」とはどんな色であろう。想像すると面白い。

同じ〝悲しさ〟にも悲哀という哀しい悲しさ。悲壮という強い悲しさ、あるいは慈悲という暖かな拡がりを持つ悲しさ等あるがどんな色であろう。

シュークスピアはすぐれた悲劇（四大悲劇などという）を著わしたが、とりわけその中で、年老いたかつての権力者リヤ王が、実の娘達に裏切られ、見捨てられて荒野をさまよう物語は凄惨な感がする。これなどはどんな色になるのか。目の粗いキャンバスに、固めの太い平筆にチューブから絵の具を直接つけて走り塗った暗い藍色の様な色か。

数年前、新潟市で、P・クレー展を観る機会があった。閉館時の間近に入ったため、走り観であったがとても面白かった。その中の一枚の抽象画に赤い色の美しい絵があり、観ていて妙に悲しい感じがした。その時何となく頭に浮かんできたのが、上田正樹の「悲しい色やね」の歌だった。そもそもそれがこの拙文の始まりである。



あとがき

※「大地」二十号が漸く発行のはこびになりました。夏の号で十月に次号をと約束しなければ、来年にズレこんでしまいそうな頼りなさでしたが、有形無形の様々な声援に支えられて、ここまでこぎつけました。

「大地」創刊は前住職・武雄が病を得たのを機に父・武雄の深い願いに動かされてスタートしたのでした。「大地」という名は、直接的には前々住職隆英が遺した歌

つくづくし　生きむ願ひの
ひとすじに　大地を割りて
伸び出でにけり

から貰い、題字は武雄が書きました。

※冒頭に掲げた俳句は、報恩講に寄せる気持を詠みこんで貰いました。一人でも多くの方の参詣を心待にしております。

※何だか一年中変な気候ですね。この秋は殊の外台風が多く雨ばかり降って寒い日が多いような気がします。さてやがて来る冬はどんな姿で現われるのやら。

※約束などせぬ方がいいよ、と心の奥で囁いていますが……次号は一月に。

（慎）